

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	3. 婦人科悪性腫瘍に対するロボット支援下手術について (第507回福島医学会学術研究集会シンポジウム抄録)
Author(s)	添田, 周
Citation	福島医学雑誌. 74(2): 47-47
Issue Date	2024
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/2454
Rights	© 2024 福島医学会
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-09-15T21:15:36Z

第507回福島医学会学術研究集会 シンポジウム抄録

日時：令和6年2月3日（土）16:00～

場所：福島県立医科大学保健科学部 福島駅前キャンパス多目的ホール1階

<第1部>

1. 福島医大のゲノム医療とがん免疫療法

福島県立医科大学 消化管外科学講座

齋藤 元伸

がんゲノム医療は、がんにおこった遺伝子変異をもとに分子標的薬などの治療薬の選択をおこなうことで高い治療効果が望まれる。次世代シーケンサーの開発とともに数十から数百の遺伝子の変異を同時に調べることができるがん遺伝子パネル検査が導入され、がんゲノム医療は画期的な進歩を遂げた。がん遺伝子パネル検査の結果はエキスパートパネルと呼ばれる専門家会議にて検討がなされ、保険診療・治験・患者申出療養の枠組みの中で治療薬の提案がなされる。この提案は、がんゲノム情報管理センター（C-CAT）が作成する調査結果を基になされるため情報格差が無いのが特徴である。また、がん遺伝子パネル検査は免疫チェックポイント阻害剤の効果が期待される遺伝子変異のパターンの解析結果もC-CAT調査結果に含まれるため、エキスパートパネルでは免疫治療の提案もなされることになる。現状、提案を受けた治療に至る例は検査を受けたかたの1割未満にとどまることであり、治験の拡大や薬剤開発のさらなる進捗が急務である。

<第2部>

2. 福島医大のロボット手術の現状

福島県立医科大学附属病院 先端的低侵襲手術センター

門馬 智之

2000年初頭に海外で内視鏡手術支援ロボットシステムによるロボット手術が開始され、まず泌尿器科領域での適応が広がった。2012年には日本でも前立腺悪性腫瘍への保険収載がなされ、国内での普及が本格化した。2018年には新たに12術式が保険収載され、泌尿器科以外の領域でも施行が行われるようになった。2020年と2022年に保険適応術式が

さらに増加し、普及が急速に進展し、2023年の国内での手術施行数は2018年の約3倍に達した。福島医大でも2013年に泌尿器科が開始し、2018年から消化管外科、2019年に呼吸器科や婦人科、2021年には肝胆膵移植外科、そして2024年に耳鼻咽喉科でロボット手術が開始された。2024年1月時点では現在の保険収載された29術式中23術式の施行体制が整い、手術施行件数も増加傾向にあり、2023年には367件と2018年と比べ約3.5倍に達した。福島医大では、ロボット手術を安全に施行できる医療従事者を育成し、県民が安心して先進的な手術を受けられるよう努めており、2022年には先端的低侵襲手術センターが設置され、ロボット手術やハイブリッド手術室を含む先進的医療の提供と医療従事者の教育・育成が加速されている。

3. 婦人科悪性腫瘍に対するロボット支援下手術について]

福島県立医科大学 産科婦人科学講座 地域婦人科腫瘍学講座

添田 周

婦人科腫瘍に対する手術において、MIS (minimally invasive surgery) は日常的に施行される術式になった。悪性疾患に対しては、2014年に子宮体癌に対して腹腔鏡下手術が始まり、2018年にはロボット支援下手術が保険収載された。当科では、両術式を提供しているが、2019年3月から導入した子宮体癌に対するロボット支援下手術について検討した。わが国では、組織型が高分化あるいは中分化の類内膜癌で、進行期1A期相当の症例が適応となる。2023年12月まで49症例に対して本術式を提供した。

年齢は52歳（36～80）、入院期間の中央値6日（5日～12日）であった。開腹手術へのコンバートはなく、Grade3以上の手術合併症は認めなかった。再発症例は一例もなく現在のところ安全に本術式を継続している。

開腹手術に比較して、入院期間の短縮、術後の創部痛の軽減、腸閉塞の軽減に寄与していると判断している。今後も、適応を慎重に判断した上で、子宮体癌及びさらには婦人科の他の疾患（子宮筋腫、子宮腺筋症、子宮頸癌）に対するロボット支援手術を行っていく予定である。